

(1) 環境園芸学科

参観授業として3授業開催した。参加者数は各授業 10 名と極めて少なかった。これまでの参観授業への参加者からは有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられていたが、参加者が少なく貴重なFDの機会が活かされていない。参観の機会を促すため開催数を増やすことも考えられる。

表 平成 24 年度 環境園芸学科参観授業と参加者数

担当教員名	参観授業名	実施日時	参加人数
山口 健一	総合防除論	12月9日(火)1時間目	2名
新谷 喜紀	自然環境実習	12月11日(木)1、2時間目	3名
永松 義博	造形デザイン演習	12月12日(金)1時間目	5名

(2) 管理栄養学科

(対象授業)

授業①:杉尾直子准教授 12月10日(水)午前・午後

宮崎-調理学実習室 食事計画論実習 I

授業②:朝見祐也准教授 1月27日(火)午前・午後

宮崎-給食経営管理論実習室 給食経営管理論実習 I

(参観者)

授業①:3名

授業②:3名

(課題)

- ・ 教授会・学科会議等での周知は出来ているが、さらに学科内での参加促進を図る必要があると考える。
- ・ 参観をする授業の時間について、多くの参加者が見込める時間設定、つまり5限等への時間の変更も必要になるかもしれない。

(3) 食品開発科学科

平成 26 年度においても、教員の授業の教授法改善等を目的として、後期に参観授業を実施した。

【対象の授業一覧】

対象教員所属	対象教員	対象授業	対象授業日時	対象授業教室
食品開発科学科	中瀬昌之先生	食品学Ⅱ	12月10日(木)3限	宮崎 C1311教室
	寺原典彦先生	食品機能学	12月11日(木)3限	宮崎 C3202教室
	なし			

- * 対象となった授業への参加は所属の学科・キャンパスを問わず参加できるものとした。また事務職員，短大教員も参加可能として，広く公開した。
- * 授業評価アンケートで上位となった教員 2 名を参観対象とした。

(実施手順)

- ・実施期間内にて対象授業の参観を実施する。
- ・参観者は教室内で対象授業の参観を行い，参観レポート(添付資料)を記入する。(当該レポートの様式は，後日メールにて配布する。参観を希望する教員は自身で印刷して参観に参加する。(印刷されたものも，後日配布予定の当該事業のチラシに添付する予定にしている))
- ・参観は業務等の関係もあるので教員への参加強制はしないが，できるだけ多くの教員に参加してもらおう。
- ・参観レポートは参観授業対象の先生へ提出する。

後期参観授業の結果の詳細については，本学のユニークな学科構成を考慮して，学科・センター別に以下に結果を示す。

【食品健康学科】

(1) 対象授業

3名の教員が担当する下記科目を授業参観対象科目として実施した。

日時	授業科目	担当教員	参観者	
12月10日(水) 3 講時	食品学Ⅱ	中瀬	0名	
12月11日(木) 3 講時	食品機能学	寺原	0名	

(2) 参観結果

上表の通り，参観者は対象 2 科目共に 0 名であった。学科内で参観授業の実施について何度か通知したにもかかわらず，参観者が得られない結果となった。他教員の授業を参観することへの教員の関心は依然として高まっていない。授業参観は，授業実施教員の改善につながる可能性のみではなく，参観者にとっても，自身の授業改善に対する意識を必要に応じて高めることにもつながると考えられているが，この結果に対しては，さらに熟慮する

必要がある。今後は、参観義務化の必要性の有無を検討することも選択肢の一つと考えられるが、授業参観の必要性についても検討する必要がある。さらに、校務の多忙化により、参加したくとも参加できなかったケースがあると思われるので、その点についても検討が必要であろう。

(4) 子ども教育学科

本学科では、2014年12月9日(火)、下記のように2名の教員による参観授業が実施された。

- ① 1限目 黒川久美 教授「教職実践演習」 参観者2名
- ② 2限目 渋沢 透 教授「教育学概論・教育原理」 参観者2名

学生の興味・関心を引く内容構成の工夫がなされており、参考になるものであった。

(5) 教養・教職センター

課題

参加者が少ないことが前大学の課題でもある。管理栄養学科報告に書いてあるように「参加促進を図る必要があると考える」。アンケート評価結果を元にして参観授業を提供する教員を来めるか議論があったが、高い評価の先生にするか低い評価の先生にするかさまざまな意見があった。授業評価アンケート結果と改善書内容を踏まえてテーマと目的を設定することを検討したい。大学か学科レベルで一番低い結果の「質問や発言をした」に組むなら、その結果が高い先生に参観授業をお願いすることも考えられる。時間の設置に課題があれば、参加しやすい時間に模擬授業を提供することも検討したい。

大学は本来、教育を行う「学者の共同対」(Community of Scholars)[3]なので、特別な参観授業のイベントがなくても、普段お互いの講義の参加できるコミュニティーを目指すのが理想的である。普段の授業参加は支え合いと情報共有の促進になれば自然と教育と研究の両方の向上に繋る。